〔千葉医学 58，397～400，1982〕

〔学会〕

第642回 千葉医学会例会
第2回 歯科口腔外科例会

日　時：昭和56年5月16日
会　場：千葉大学医学部附属病院第2講堂

1. 下顎関節突起骨折の分類と予後

○高原利幸，高原正明，金沢春幸
秋山行弘，露崎孝二　（千大）

昭和45年1月より昭和54年12月に至る10年間に千葉大学歯科口腔外科を訪れた顎関節突起骨折患者は，下顎骨骨折370例中92例（22.4%）で，性別頻度は，男女比4：1で男性が多く，年齢別では20歳代が最も多く31例（33.7%）であった。

我々はこれらの症例につき臨床統計的観察を行ないその一部については，遠隔成績も調べ，おおむね良好な成績が得られた。

2. 稀れなる Pycnodysostosis の1例

○花沢康雄，石山信之，小原正紀
高原利幸，尹　錫哲，飯田泰一
（千大）

Pycnodysostosis は，1954年青池により初めて紹介され，1962年 Maroteaux & Lamy によって Pycnodysostosis と名付けられ，現在まで約120例程の報告がある。本症は，小人症，頭蓋縫合，泉門の開存，上下顎骨形成不全，特に下顎角の消失，全身骨格の骨陰影濃化と易骨折性，指趾末節の短縮及び末篩骨の溶解性骨欠損を主徴とする。今回我々は，本症の特徴的所見を有する11歳男性の症例を口腔内所見中心に報告した。

3. 下顎発育異常による顔面非対称の外科的処置

○柴　博孝，木村孝雪，磯貝嘉伸
石山信之　（千大）

片側性下顎関節突起異常発育による顔貌の変形に対し，我々は今回の2症例共に，咬合の回復と審美性の改善を主眼に手術を行った。症例Ⅰでは，咬合不全を伴っている症例であり，Obwegeser 法により咬合の改善，ならびに，下顎骨底部切除術を行い，また症例Ⅱでは咬合は比較的よく保たれていたため，下顎骨底部切除術を行った。特にこの症例では，下顎縁の切除骨片を利用し陥凹した下顎骨頰側に即時に移植し，頰部の膨隆の回復を計って，良好な審美性を回復した。

4. 顎関節症の興味ある3例

○荻原　力（荻原歯科クリニック）

顎関節症は主として咬合異常に心理的な要因が重り合って生じるものといわれているが，種々の身体的疾患もその原因になり得る。私は本症に関心を持って診療に当っている者の一人であるが，今回はその中から，外傷に起因するもの1例，片側性咀嚼に起因するもの1例，異常咬合に細菌感染の疑いを持たれたもの1例の計3例について，その原因除去，咬合調整などにより良好な機能を回復しえたので報告する。

5. 上顎前突症の矯正学的処置

○今井　香樹（今井歯科クリニック）

近年矯正治療はフルバンド装置で多大の成果をあげてきたが，割合大きな力を必要としてきた。従来のフルバンド装置やアクチバートルなどの欠点を補い，利点を取り入れて bioprogressive therapy が生じた。これにより今まで臨床経験から起った否定的な事実や制限に対していくつかの優れた可能性を生じ，最終的には正常咬合を確立すると共に審美的効果を増す方法へ導くことが出来る。今回上顎前突の1症例にこの治療法を応用し従来より優れた結果を得たので報告する。

6. 埋伏歯の外科的矯正
―即時移動を行った症例の検討―

○榎本武司，京田直人，鈴木章敬
阿部泰子，遠山良成，高平久隆
会田卓久，堀　稔，工藤逸郎
（日大・歯・口外）

従来抜歯の適応症と考えられる若年者の埋伏歯や濾胞性歯嚢胞に関連した埋伏歯に対し，上顎前歯7歯，下顎

犬歯1歯，下顎小臼歯5歯，計13歯に矯正学的処置をも含め，外科的に即時移動を行い良好な結果を得た。埋伏の状態にもよるが，この方法により，多くの歯牙が保存でき，機能をいとなませることが可能である。

7. 歯科処置に偶発する顔面神経麻痺の検討

○土屋晴仁，武藤寿孝，柴　博孝
石津貞之　　（千大）

今回，われわれは，患者40歳女性が，某歯科にて無麻酔でブリッジ支台歯形成した後，翌朝より左側末梢性顔面神経麻痺（ベル麻痺）が発生し当科受診後，薬物療法，マッサージ療法により完治した症例を経験した。特に誘因なく歯科治療で起る顔面神経麻痺は時に報告されているが，このような症例については誘因を検討し報告した。

8. 軽度の挫傷から発した tetanus の1例

○秋山行弘，高原正明，内山智子
岩田康一　　（千大）
伊藤直樹　　（千大・神内）
小林章男　　（千大・検査部）

破傷風の罹患は近年比較的稀であるが，ひとたび発症すると，その致死率はきわめて高く，予後不良の疾患である。患者は，69歳の女性で，口腔内に何ら開口障害の原因と考えられるような症状がなく，右膝蓋部に軽度の挫傷を受けた約2週間後に，開口障害を主訴として当科へ来科した。入院後，歩行障害などの症状を伴ったが，典型的な破傷風の症状を発現しなかった1症例に遭遇したので，経過を報告し，若干の考察を加えた。

9. Infectious mononucleosis の1例

○高原正明，大木保秀，今井　裕
内山智子，小林　操　　（千大）
寄藤和彦　　（千大・皮膚）
小林章男　　（千大・検査部）

われわれは感染性単核症の1例を経験したので報告する。患者は18歳女性で，顎下，頸部の腫脹を伴う歯性感染症の疑いで当科紹介された。歯性頸部リンパ節炎の診断のもとにAB-PC系抗生物質投与後4日目より，全身に及ぶ皮疹が出現，さらに39°C を越える発熱，全身リンパ節の腫脹を認め，軽度に脾腫も触知した。又，末血像にダウニーII型の異型リンパを多数認め，これらの臨床所見と検査結果より，感染性単核症と診断した。以後ステロイドを含む対症療法により軽快をみた。近年，本疾患とアンピシリンによる皮疹が注目されているが，本症例でもアンピシリン投与後より皮疹の出現を見た。今後充分留意しなければならない問題である。

10. 下顎骨吸収性病変の2例

○藤原元幸，額賀康之，金沢正昭
堀越達郎
（東日本学園大学・歯・口外）

我々は，X線写真上，下顎骨臼歯部の，骨の吸収像をみる他，自他覚的に殆んど症状をみなかった2症例について手術を施行した。47歳女性症例では単純性骨嚢胞，26歳男性症例では乳頭状内皮細胞増殖を伴なう毛細管性血管腫の診断を得たのでその概要を報告した。

11. 頸部まで拡大した広範囲歯性膿瘍の2例

○磯貝　嘉伸，武藤寿孝，今井　裕
金沢美智子　　（千大）

今回我々は頸部まで拡大した広範囲歯性膿瘍の2例を経験したので報告する。症例1：患者：48歳，女性，$\overline{|6}$の自発痛と左顎下部より頤下部に及ぶ腫脹を主訴に来院。入院の上，同部に切開術を施行したが，腫脹は右胸鎖乳突筋に沿い，頸部を下行拡大した。症例2：患者，32歳，男性，$\overline{|7}$の自発痛と左右顎下部，頤下部より前頸部に至る腫脹のため来院，入院の上左右顎下隙および前頸下部の膿瘍を切開した。しかし膿は舌骨のレベルを超え，下方に貯溜する傾向があり，入院10日目に，鎖骨上窩より排膿した。2例とも頸動脈血管鞘および縦隔への波及は認められなかった。

12. 幼年期より観察した下顎骨骨髄炎の1症例

○小原正紀，今井　裕，花沢康雄
内山　聡，露崎孝二　　（千大）
藤原元幸，額賀康之，金沢正昭
堀越達郎
（東日本学園大・歯・口外）

近年，抗生剤の普及により，重篤な化膿性疾患は稀になったが，一方，難治化した下顎骨骨髄炎が，時に発生する。今回は，我々は，このような現況にあって幼年期より10年間にわたり経過した症例を経験したので報告した。本症例は，患者が成長期にあっては化学療法にて経過観察を，成人となってからは，外科療法，抗生剤，ステロイドを併用し，今後の治療に参考となると思われる